『世界各国で報告されたLASIK に関する報告を総合的に評価した結果、平均して患者の95.4%がLASIK 手術に満足していた。これまでに各国で施行された1630 万件の手術、および10 年を超える臨床研究と技術革新により、LASIK 手術は最も成功した待期手術の1 つであり、LASIK 手術はその他の待期手術と比較して、満足度がより高いと評価できる』

『米国食品医薬品局が承認したLASIK 装置に関する研究のメタアナリシスにより、97%の患者がUCVA 20/40 (裸眼視力0.5 相当)を達成し、62%の患者がUCVA 20/20(裸眼視力1.0 相当)を達成したことがわかった。本手術が広く受け入れられ成功したのは、患者にとって簡便で快適な手術であり、優れた裸眼視力が得られ、合併症発生率が比較的低く、合併症から回復不能な視力障害につながることは稀であることによる』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

米国サウスキャロライナ大学のソロモン博士らが、2009 年 4 月の眼科医学雑誌Ophthalmology に ***『LASIK　世界の文献レビュー　生活の質(QOL)および患者満足度』*** として、レビューを発表しました。

レビューは、1988～2008 年に発表された2915 件の関連論文から、LASIK 手術情報を含む文献検索を実施。引用の全抄録をレビューし、そのうち関連論文1581 件(そのうち1461 件は英語、120 件は英語以外)を詳細に分析後、研究デザインの強度およびエビデンスの重みに基づきそれぞれを評価。適正にデザイン、実施されたランダム化臨床試験と、適切にデザインされたコホート研究および症例対照研究のみ309 件の論文が選択されました。ちなみにこれらは、サウスカロライナ医科大学Storm Eye Institute(米国サウスカロライナ州チャールストン)の眼科医2 名および眼科研修医5 名からなるパネルが論文をレビューした、とされています。

この309 件のうち、19 件(6.1%)が患者のQOL と満足度の双方を報告し、合計2198 例の被験者が含まれたとされ、

『これら19 件の論文では、手術は1995～2003 年に施行されたもので、初回LASIK 手術後の全体的な患者満足度は95.4%であった(2198 例中2097 例、19 論文の患者満足度の範囲は87.2～100%)。近視矯正LASIK 後の患者満足度は95.3%(1901 例中1811 例)、遠視矯正LASIK 後は96.3%(297 例中286 例)であった』

と報告されています。

これら19 件の研究はエジプト、フランス、インド、イラン、アイルランド、オランダ、スコットランド、南アフリカ、スペイン、トルコ、アラブ首長国連邦、英国、および米国で実施されたもので、1996～2007 年までに発表され、手術は1995～2003 年までに施行されたものでした。これらの研究の追跡期間は1 ヶ月～5 年、報告された被験者の年齢は18～67 歳、治療された等価球面度数は−22.75～+7.00 ジオプトリーであった。計63.2%(19 件

中 12 件)はプロスペクティブ（前向き研究）であり、36.8%(19 件中 7 件)はレトロスペクティブ（後向き研究）であった。と補足されています。

さらに、これらの論文を、視力、夜間視覚症状(グレアおよびハロー)、患者満足度・QOL、ドライアイについて詳細に分析。その結果として、

『世界各国で報告された LASIK に関する報告を総合的に評価した結果、平均して患者の 95.4%が LASIK 手術に満足していた。これまでに各国で施行された 1630 万件の手術、および10 年を超える臨床研究と技術革新により、LASIK 手術は最も成功した待期手術の 1 つであり、LASIK 手術はその他の待期手術と比較して、満足度がより高いと評価できる』

『米国食品医薬品局が承認した LASIK 装置に関する研究のメタアナリシスにより、97%の患者が UCVA 20/40 (裸眼視力 0.5 相当) を達成し、62%の患者が UCVA 20/20(裸眼視力 1.0 相当) を達成したことがわかった。本手術が広く受け入れられ成功したのは、患者にとって簡便で快適な手術であり、優れた裸眼視力が得られ、合併症発生率が比較的低く、合併症から回復不能な視力障害につながることは稀であることによる』

と報告しています。

不満要因に関しては、

『最も一般的な不満の原因の一つは残余屈折異常による術後 UCVA（裸眼視力）の低下である。同様の結果は Levinson ら[32] によって認められている。同著者らは、LASIK 後の患者紹介と患者の不満の原因についてレビューしており、遠見視力不良、ドライアイ、充血・疼痛、グレアおよびハローが最も一般的な主訴であると結論した。これらの研究に報告された結果の多くは、残余屈折異常を改善するためのエンハンスメント手術前のものであった。従って、実際の患者の満足度は我々が報告した結果よりも高い可能性がある。近視および遠視の双方に対して最新の治療範囲内で手術が施行されれば、目標屈折度数の予測可能性は向上し、一般的に残余屈折異常は低下するため、満足度はより高いことが予測されるであろう』

と報告しています。

その他、夜間視覚症状(一般的にはグレアとハロー)に関しては、

『ウェーブフロント LASIK、非球面照射、より広範な治療領域などの照射プロファイルの改善により、グレアおよびハローによる夜間の視覚的問題が減少していることが示されている。軍における研究では、最先端のレーザー視力矯正技術を用いることにより夜間視力が改善することが示されている。現在、米軍の全部門はレーザー視力矯正を、能力向上ための一手法として採用している。現在海軍および空軍のパイロットにも許容されている手術であり、ごく最近では NASA でも承認された』

術後のドライアイに関しては、

『術前スクリーニングを通じて術前に病歴と眼病歴に関する詳細情報に細心の注意を払い、涙腺機能不全状態をコントロールするための先行治療を術前に行うことで、術後のドライアイ増悪を回避することができる。レーザー視力矯正により一時的にドライアイが惹

起される可能性はあるものの、最新の薄型フラップによる LASIK 手術は長期ドライアイ発生率の低下をもたらす。加えて、ドライアイ罹患患者のための最新の治療選択肢もある。最新の治療法の使用、新しい人工涙液、低用量コルチコステロイドによる免疫修飾の使用、局所用シクロスポリンによる免疫修飾、最新の抗炎症薬、眼瞼炎などの状態に注意を払うことにより、大半のドライアイ患者では時間とともに快適さが増し症状が減る』

と報告されています。

また、論文の中には、

『米国からの1 件の研究では全体的な満足度は93.6% であったが、97.0%がLASIK を友人に勧めるであろうと回答した。アイルランドで行われた研究では全体的な満足度は96.0% であったが、100%がLASIK を友人に勧めるであろうと回答した』

という例も報告されていました。

その他にも、美容手術との満足度の比較や、眼鏡・コンタクトレンズとの QOL 比較など、徹底的な検証がされており、また、米国内での LASIK 手術と、米国外での LASIK 手術の満足度の比較も実施。*『有意差は認められなかった』*とも報告されています。